

プロジェクト名 第5回夜のピクニック

代表/長谷川 貴章 理学部 生物科学科 3年

■実施の内容

本企画「僕らの歩行祭～北の大地で夜のピクニック～」は通称「夜ピク」として今年度で第5回目の開催となった。普段何気なく行っている“歩く”ということの素晴らしさや面白さ、魅力に気づいてもらうこと、70km歩くという特異な時間・空間の中で達成感や仲間とのつながりを感じてもらうこと、地域の活性化に貢献すること、この三つを目的とし、原作『夜のピクニック』（恩田陸著、新潮社、2004年）のように24時間約70kmを歩くイベントである。

運営メンバーの実際の活動は、週一回のミーティングを軸とし、運営・広報・総務の三班に分かれて連携を取りながら進められた。

昨年度のイベント終了後、10～3月は規模・テーマ・ルート・予算について、4月は新歓活動・予算確認・ルートの確認と訂正・元気プロジェクトへの申請について話し合いを行った。同時に夜のピクニックの宣伝を兼ねて4、10、11月には約20km、30名程度の規模のミニピクニックを開催した。5、6月は参加者向けのしおりの作成・必要物品の確認と確保・保険や民間救急の手配などを進め、並行してルート確認のためのリハーサルを繰り返し行った。また、ピラ配り・SNSへの掲載・ポスター掲示・北大祭などを通して積極的に広報活動を続けた。さらに本番二週間前の「参加者交流会」に向け準備を進めた。この「参加者交流会」では、参加者に本番の詳しい説明を行い、歩く際の班を発表、その後、班でのぼりを作成してもらった。事前に参加者同士、また参加者と運営メンバーの交流を行うことで、当日の安心感や安全面の向上に繋がると考えた。交流会後の二週間はより綿密な打ち合わせとルートの確認、当日の動きを確認し本番に備えた。

今年度は朝9時に北大中央ローンを出発し、新川通り・星観緑地・銭函の海沿いを通り、21時に折り返し地点である朝里川公園着、その後銭函・手稲・発寒を経て翌日朝10時頃に北大に戻ってくるルートを計画していた。これは、昨年度の石狩方面へのルートとは異なる新ルートであり、往路・復路共に海を見ながら歩くことができ、さらに川沿い・海沿い・町中と往復路でそれぞれ異なる景色を楽しめるような道のりとなっている。10km弱歩くごとに30分程度の休憩を入れ、参加者全員が完歩できるような配分にした。また、配給としておにぎりや菓子パン、栄養ゼリーなどを配ったり、民間救急に加えワゴン車3台を用意し負傷者や体調不良者の運搬に備えたりと、参加者が元気がかつ安全に70kmを歩ききれるような工夫を凝らした。特に今年度は平坦な一本道が多かったため、レクリエーションとして看板探しなどのミニゲームを企画し、飽きずに楽しく歩けるよう配慮した。参加者が歩く際の基本単位である班の人数は約10名で全10班とし、班分けは参加登録の際のグループや参加者の情報を基に行った。当日の運営メンバーは参加者の中に入って実際に一緒に歩く「歩行部隊」、交差点や分かりにくい道を案内する「案内部隊」、全体の流れを統括し指示を出す「本部」の三つに分かれて動いた。24時間運営メンバーが活動し続けられるよう、部隊の変更などのシフトを綿密に組んだ。

当日は雨予報で心配されたものの、予定通りに開会式を行い北海道大学中央ローンから出発した。休憩地点である発寒西陵公園を通過し、順調に進んでいたが、前田森林公園に入る前あたりから雨が降り出し、星観緑地に着くころには大荒れになってしまった。雷雨の危険もあったため、参加者の安全を考え、星観緑地で途中解散とした。

全体の三分の一ほどしか歩くことができず、加えて参加者からももっと歩きたかったとの声があったため、9月17、18日に「リベンジピクニック」を開催した。このリベンジピクニックでは夜のピクニックの復路で歩くはずだったルートをそのまま使い、20時朝里駅発・翌日7時半中央ローン着という“ミニ”夜のピクニックと

した。雨が少し降ったものの、予定通りに歩ききることができた。夏休み中の開催であったため参加者は 16 名と少なかったが、内 9 名が第 5 回夜のピクニックの参加者であった。

イベント終了後、参加者アンケートの実施と今年度の運営の反省を行い、来年度に向けた展望を話し合った。

■実施時期

2016 年 6 月 18 日（土） 参加者交流会

2016 年 7 月 2 日（土）・3 日（日） 第 5 回夜のピクニック（雨天のため、3 日は中止）

2016 年 9 月 17 日（土）・18 日（日） リベンジピクニック

■実施の評価

「第 5 回夜のピクニック」は悪天候により途中解散で終わってしまい、後悔の残る結果となってしまった。しかし、歩行中は参加者の笑顔や楽しく話す様子が見られ、短い距離であったが楽しかったとの感想が寄せられた。

また、復路のみのリベンジピクニックにおいて、本来の半分の距離ではあるものの特別な時間・空間の中で味わえる達成感を感じてもらうことができた。全体を通して、仲間との繋がりだけでなく、何よりも歩く楽しさや魅力を伝えることができた。

今年度で第 5 回を迎えた夜のピクニックだが、運営メンバーの人数の増加や代替わりもあり、様々な変化が見られた。

まず、昨年との大きな違いは、参加者数の増加である。昨年度の参加者が約 70 名であったのに対し、今年度は約 90 名と大幅に増加した。これは、昨年度の第 4 回夜のピクニックの成功と広報活動の充実によるものだと考えられる。昨年度の夜のピクニックは完歩率が 96%と高く、満足度も高い大きな成功を遂げたイベントであった。その影響もあってか、リピーターの参加者が多く、今年度の夜のピクニックへの参加や、サブイベントであるミニピクニック（4、10、11 月）への参加が見られた。特に、ミニピクニックはこれまで参加者が 10 名程度であったのに対し、今年度は約 30 名とこれまでの 2~3 倍の参加者が集まった。参加者数の増加は、4、10、11 月に実施した全てのミニピクニックに共通して見られた傾向だった。

このようなことから、本イベントの知名度の上昇、口コミの広まりといった非常に良い勢いを感じることができた。また、今年度の企画書で挙げていた「地域」という視点においては、景観の良い道を選ぶ、配給に小樽のお菓子を加える、しおりに地域紹介のページを設けるといった取り組みを行った。これにより歩く地域の魅力を伝えることができたと考える。しかしこの取り組みは一方的なものであり、例えば地域の施設を貸していただいたり、名所をルートに加えたりといった相互的な関わりを持つことが今後の課題である。

一方で、昨年の課題として挙げられていたスケジュールリングの確立、運営メンバー内でのネットワークの構築については克服できていたと考えられる。特にスケジュールリングの確立については、昨年のイベントが終了した段階から計画的に準備を進めることで余裕をもって広報活動や物品準備などを行うことができた。これは参加者数の増加にも反映されていると考えられる。さらに、運営メンバーを運営、広報、総務の三つの班に分け、そこからそれぞれの班の中でも細かな担当に分けることで仕事を細分化し、メンバー全員が企画に携われるようにした。これにより組織としての土台をより強固なものにすることができ、各自が責任をもって準備を進めることができた。

しかし、今回の悪天候による途中解散を踏まえて見えてきた課題もある。それは雨天時の対応である。今回は星観緑地で解散したため、参加者の殆どが近くの星置駅から電車で帰路についた。ルート上仕方ない部分もあるが、中止にするか否かの判断の後参加者の安全を第一に考えすみやかに解散場所まで誘導する必要がある。雨が降り途中で解散する場合はどこまで歩き、どう誘導するかをさらに綿密に話し合い決定しておくようにしていきたい。

以上のことより、今年度の「夜のピクニック」は途中解散となってしまったものの、その後のサブイベントの

様子から、参加者が“歩く”ことへの興味を持ち、魅力を感じてくれていると言えるであろう。来年度の課題としては、上述したように地域との関連性の向上、雨天時の対応、またイベント規模の模索、知名度の向上が挙げられる。来年度以降も参加者に非日常的な体験を通して“歩く”ことの魅力を伝え、地域に根ざしたイベントとなるよう、運営メンバー一同努力していく。

■ 構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
新谷 研人	工学部	環境社会工学科	4
大塚末紗樹	北星学園大学		4
石川 恵太	理学部	生物科学科	3
佐藤 公亮	水産学部	海洋生物科学科	3
反田加那子	法学部	法学課程	3
治田 芽生	文学部	人文科学科	3
佐々木莉乃	藤女子大学		3
佐藤 風花	藤女子大学		3
浅沼 丈	工学部	情報エレクトロニクス学科	2
小野 萌夏	農学部	生物環境工学科	2
加藤 亮介	工学部	環境社会工学科	2
沼澤 里佳	理学部	生物科学科	2
藤岡 拓生	理学部	化学科	2
星野 諒哉	工学部	応用理工系学科	2
島田 亜実	藤女子大学		2
磯田 佳奈	北海道医療大学		2
槌賀 優希	北海道医療大学		2
岡部友紀乃	総合教育部		1
河野 舜	総合教育部		1
久保田航平	総合教育部		1
齊藤 晃大	総合教育部		1
齋藤 琢弥	総合教育部		1
齊藤 梨紗	総合教育部		1
嶋田 多希	総合教育部		1
白井 久希	総合教育部		1
田口 大貴	総合教育部		1
辻 愛子	総合教育部		1
湊川 菜穂	総合教育部		1
秦 宙基	総合教育部		1
早川 梨穂	総合教育部		1
藤井 彩	総合教育部		1

■自己採点

【採点項目】

- 当初の目的を達成できた
- 期待される成果・効果をあげられた
- 自主性・創造性を発揮できる機会となった
- 今後の学生生活に役立つ経験であった
- 修学及び研究意欲を高めることができた

5：特にあてはまる

4：あてはまる

3：まああてはまる

2：あまりあてはまらない

1：まったくあてはまらない

